

100 Years of Czech Comics

チェコ・コミックの100年展

メイン解説(全期、各期、原画出展作家) 日英対比テキスト

展示会場: 明治大学 米沢嘉博記念図書館 1階展示室

展示期間: 2017年9月29日[金]~ 2018年1月28日[日]

主催: 明治大学 米沢嘉博記念図書館

後援: チェコ大使館

協力: チェコセンター東京、チェコ文学アカデミー、モラヴィア美術館

監修: パヴェル・コジーネク(Pavel Kořínek)、

トマーシュ・プロクーペック(Tomáš Prokůpek)

監修協力: ジャン・ガスパール・パーレニーチェク(Jean-Gaspard Páleníček)

企画協力: 株式会社イデッフ

◆本展示は会期を4期に分け展示替えします。※テキストは各期ごとに順次追加します。

第1期: 9月29日(金) - 10月23日(月)

チェコ・コミックの現在(2000年以降) — チェコ・コミックの現状と魅力 —

原画展示: パヴェル・チェフ(Pavel Čech)

第2期: 10月27日(金) - 11月20日(月)

チェコ・コミック 1945年以前 — チェコ絵物語とコミックの誕生 —

原画展示: カレル・イエリエ(Karel Jerie)

第3期: 11月23日(木・祝) - 12月11日(月)

チェコ・コミック 1945-2000年 — イデオロギーと監視下のチェコ・コミック —

原画展示: ルチエ・ロモヴァー(Lucie Lomová)

第4期: 12月15日(金) - 2018年1月28日(日)

チェコ・コミックのメディアミックス&チェコ・コミックの中の日本

原画展示: ニッカリン(Nikkarin)

チェコ・コミックの100年展

近年チェコでは独自のコミックス文化が育ってきました。長く続いた社会主義体制下で抑圧されていた世界のコミックス文化が、自由化後、一気に紹介されました。その刺激とショックの中 — 例えば、フランス/ベルギーのバンド・デシネとの交流、アメリカのコミックスや日本のマンガの影響などから、絵本でコマ割りが用いられたり、あるいは名作がコミックス的な挿絵により再版されるなど — 新しい潮流が浸透してきたのです。

2

本展では、会期を4期に分け、雑誌・単行本・資料によりチェコ・コミックの源流を辿り、その歴史を総覧します。また現代を代表する4人の作家、パヴェル・チェフ、カレル・イエリエ、ルチエ・ロモヴァー、ニッカリンを原画にて紹介します。チェコ・コミックの、約100年に渡る長い歴史の海に乗り出す、日本初の小さな船での航海をお楽しみください。

100 years of Czech comics

During modern years, Czech Republic's original comics culture has known a continued growth. World's comics culture, which had been oppressed by the long-lasting Communist reign, has been reintroduced in Czech Republic all at once after the dictatorial regime's fall. Amidst this stimulus and marvel – for example through interaction with Franco-Belgian comics (BD) or under the influence of American and Japanese comics, through the use of frames in illustrated books, or the adaptation of famous stories into comics forms – new tides of comics have appeared.

Our exhibition will be divided into 4 parts, in which we will introduce the beginnings, the history and the contemporary scene of Czech comics through magazines, books and other data. As a key framing, each part will also introduce one Czech comics author through original drawings – Pavel Čech, Karel Jerie, Lucie Lomová and Nikkarin –representing the current, modern era of Czech comics. We invite you to enjoy this cruise on Japan's first small boat, sailing on the seas of the 100 years long history of Czech comics.

全体解説

チェコ語のコミックスの起源は、19世紀の中頃まで遡ることができる。当時チェコの土地は、オーストリア＝ハンガリー帝国の一部だったが、チェコ語の出版物はある程度広まっていたし、都市文化(特にプラハとブルノ)の成長により、新しい読者層も増えていきつつあった。1850-60年代に確立された、最初の、チェコ語のユーモア画および風刺画の中に、近代コミックス初期の先人たちが登場しはじめる。彼らはドイツ、フランスなど、より発展した出版文化を持つ他のヨーロッパ諸国の影響下にあった。ただ、稀な例ではあるが、海外の作品に影響を与えたチェコのアーティストもいた。例えばカレル・ヴァーツラフ・クリーチ(1841-1926)。彼はオーストリアとイギリスでコミックスを描き出版していた。

20世紀初頭の10年間に、フキダシが使用されているチェコ語での最初のコミックスが少数ながら出版された。しかし、チェコ・コミックスの歴史が本当に始まったのは1918年の第一次世界大戦終結およびチェコスロバキア共和国建国のあとだといえる。チェコスロバキア共和国が独立した結果、チェコ語の出版物とその市場は大幅に拡大した。

1920年代の新聞や雑誌では、ヨゼフ・ラダ(1887-1957)やオンドжей・セコラ(1899-1967)などの有名なイラストレーターがコミックスも描き出版していた。そこには、のちにまた登場するような有名なキャラクターたちがすでに描かれていた。

チェコのコミックスは当時、ヨーロッパやアメリカから輸入し翻訳された一連の作品に大きな影響を受け、制作されていた。他のヨーロッパ諸国と同様に、1920-30年代のチェコ・コミックスには、次の二つの形式のものがある。1.テキストコミックス(散文や詩のような言葉が絵の下に配置されているもの)、2「一般的な」コミックス(コマの中の絵にフキダシが入るもの)。これら2つのうち前者は、通常、批判的かつ教育的な当局によって、子どもの読者にとってより適切であるとみなされ、「良いもの」として促進され擁護された。後者のタイプ、現代的な意味での「一般的な」コミックスは、しばしば純粋でない、または有害である(適切な読書習慣を失う)と主張された。一方で、アニメーションを介してチェコスロバキアにやってきた、フィリックス・ザ・キャットや、まさに生まれたてのディズニーキャラクターたちの爆発的な人気は、新たな傾向を推進した。

チェコのコミックスジャンルの大半は、一次大戦と二次大戦の間に確立されている。最初はゆかいな動物ものが登場し、ウエスタン、探偵もの、冒険ものも誕生した。1920年代後半から1930年代前半には、コミックス専門誌や、少なくともコミックスをメインにすえたいいくつかの雑誌(『コウレ』、『マリー・スプラボダイ』、『ブンチャ』)が創刊されたが続き、実際に人気が出て出版されつづけたコミックス専門誌(『ムラディー・フラサテル』『ブンチャ』など)は1930年代末まで登場しなかった。

コミックスは徐々に重要な位置を占め、週刊新聞、ユーモア雑誌、子ども向けや青年向けの雑誌、新聞のふろく的な役割を担うようになった。コミックスと美術の周縁にも面白い作品が生まれた。ヘレナ・ボホジャーコヴァー・ディトリホヴァー(1894-1980)の白黒の木版画で描かれた文字のない物語は、ドイツ、フランス、イギリスでも出版されている。

1939年に第二次世界大戦が始まった後、短期間ではあるが、戦時コミックスブームが続き、その傾向は部分的にはあったがさらに盛り上がった。ヤロスラフ・フォグラル(1907-1999)が原作、ヤン・フィセル(1907-1960)がイラストのコミックスシ

リーズ「リフレ・シーベ」(「速い矢」)は、町に住む5人の少年の日々の冒険を描いたものである。若者の間で大きな成功を収めたこのシリーズは、より斬新で現代的な形式の連続的絵物語で、フキダシの使用を推進した。

二次大戦の終戦まで、ナチスドイツ保護領下におけるチェコとスロバキアのコミックスは、再び深刻な抑圧状態におかれた。その主な原因は、ナチスがチェコ文化を弾圧し、コミックスを含む出版物を検閲したことであり、また当時は紙そのほかの資源が不足していたからでもある。

戦後すぐの「パルプフィクション」反対の動きがコミックスの出版に与えた影響は、予想していたよりは小さなものだった。新聞や雑誌の多くは復刊せず、以前の人気コミックスのヒーローも消えていたにもかかわらず、新聞や雑誌には、日々コミックスが掲載され競いあった。コミックスが新しい読者を引きつけたのである。当時、ユーモア雑誌や子ども向け雑誌には、多くの新しいチェコ・コミックが登場した。

そうした喜ばしいムードは、1948年2月に起こった共産主義クーデター(2月事件)によって劇的に暗転した。報道はほぼすぐに、かなり規制された。例えば、宗教的報道、他の共産党以外の政党に対する意見や、あるいは新しく設立された社会主義体制への批判的アプローチのある報道などは、「プロレタリアによる独裁」によりすべて禁止されたのである。

フキダシ付のコミックスは、「帝国主義のパルプ」と名づけられた。1950年代の中盤まで、少数の子ども雑誌のみで続いた連続ストーリーは、イラストの連続した(またはフレームの外にテキストのついた)おとなしい形のものだった。

1950年代後半から1960年代初めにかけて、コミックスは1948年以前の児童書やユーモア雑誌に載っていた形にゆっくりと戻った。スターリンの死後、ソビエト連邦で起こったスターリン批判のムーブメントによってイデオロギーや社会に対する抑圧が多少やわらいだのである。

1968年8月、ソ連の戦車がチェコスロバキアに到着し全土を占領したとき(チェコ事件)、チェコ・コミックの未来は再度暗澹とするかみえた。が、今度の共産主義体制は1950年代ほど厳しくはなかったため、続く1970-80年代には、国家経済の冷え込みや、窮屈な社会的制約から人々の目をそらすための、低俗な、あるいは子どもだましの楽しみとして、いくつかの表現形式やジャンルが容認された。しかし、社会は再び資本主義の国々からは完全に隔離され、しばらくはチェコ・コミックも世界から隔離されてしまった。

チェコ・コミックの歴史は、ざっくりとだが周期的に上向きになったり下降したりしている。1989年の民主化デモをきっかけに、チェコスロバキアの共産主義体制が崩壊(ビロード革命)した後には、再び上向きに変化した。長年の統制のため、人々はコミックスに飢えていた。ニューススタンドには新しいコミックス雑誌が氾濫し、ほぼすべての定期刊行物にコミックスが再び掲載された。けれども、そんな状態はすぐに消え去った。大きな経済変動の中、出版状況や文学の価値は崩壊し、物価は急上昇した。そんな中、チェコのコミックスは、海外からの輸入作品と競争できるほどの経験がなく、太刀打ちできなかった。それは、他の娯楽メディアも同様だった。

チェコ・コミックに再び新たな風が吹くのは、21世紀に入ってからだった。若い世代のアーティストたちは、今、世界のコミックスに触れることができる。日本のマンガも最近関心を集めている。彼らは世界のコミックスの傾向を踏まえて創作している。つまり、作家が望むことは何でも“自由”に表現でき、検閲によって制限されず、社会的にも文化的にも否定されない状態となっている。コミックスは徐々に、これまでの壁を破ることに成功していった。これは、チェコでは、おそらく初めての状態である。

コミックスは子どものもの、あるいは低俗なもの、単なる時間つぶしのものというステレオタイプな概念から抜け出したのである。自信と誇りを持って提示できる作品はますます増えている。チェコ・コミック界は、連続する絵と物語の未来を見つめていくだけでなく、自身の歴史を掘り下げていくことができるのである。

Introductory text to all 4 episodes

The roots of the Czech comics tradition may be roughly dated to the midpoint of the 19th century. Czech lands were then a part of the much larger Austro-Hungarian empire, but the Czech-language press was expanding and was finding its new readership thanks to the growing urban culture in the larger cities (especially Prague and Brno). In the first Czech-language illustrated humour and satirical magazines, established in the 1850s and 1860s, the early predecessors of modern comics started to emerge. These pictorial sequences were often times inspired by foreign examples from Germany, France and other European countries with more developed press culture. In rarest examples, some Czech artists of that time were even able not just to be inspired by foreign works, but also to inspire and work abroad, as was the case of Karel Václav Klíč, who worked and published his comics in Austria and the United Kingdom.

The first few Czech-language comics with speech balloons were published in the first decade of the 20th century, but it was only after the end of the First World War and the establishment of Czechoslovakia in 1918 that the history of modern Czech comics really started. As a result of the establishment of the independent Czechoslovak Republic, Czech-language press expanded significantly.

Thus, in newspapers and magazines of the beginning of the 1920s, well-known illustrators such as Josef Lada (1887–1957) or Ondřej Sekora (1899–1967) published comic strips that for the first time contained heroes who kept coming back in subsequent issues.

The Czech comics production was at that time still much influenced and shaped by the imported and adapted series of European and American origin. As in other European countries, in the Czech comics of the 1920s and 1930s, one can easily identify two competing formal types of pictorial sequential narration: 1/ text-comics (with captions in prose or verse located beneath the panels), and 2/ ‘true’ comics (with speech balloons in the panels). The first of these two was usually considered by the critical and pedagogical authorities as the more appropriate for the kid readers, and was therefore promoted and considered as a ‘good practice’. The latter type – ‘true’ comics in the modern sense of that word – was often attacked as unsophisticated or even harmful (it was argued that it spoils proper reading habits), nevertheless the enormous popularity of Felix the Cat or the ‘just-born’ Disney characters (that came to Czechoslovakia via animation) pushed in this other direction.

It was during the interwar period when the majority of the genres of the Czech comics were established – the first comics featuring funny animals appeared, and western, detective, and adventure comics also made their debut. The late 1920s and the first half of the 1930s were witnesses to several attempts to establish purely (or at least primarily) comics magazines (Koule, Malý zpravodaj, Punťa), but, in reality, the first “long-term” projects didn’t start to become popular before the end of the 1930s (Mladý hlasatel, Punťa).

Comic strips gradually held a more and more important position, becoming a common component of illustrated weekly newspapers, humour magazines, magazines for children and youth, but also newspapers’ supplements. Interesting works were also created on the fringes of the comics production and fine arts. Wordless books or novels produced in black-and-white woodcut illustrations by Helena Bochořáková-Dittrichová (1894–1980) were so remarkable that they were published also in Germany, France and Great Britain.

After the World War II began in 1939, for a short time the comics boom of the interwar era managed to continue, and some of its trends even climaxed. The comics series Rychlé šípy (The Fast Arrows), written by Jaroslav Foglar (1907–1999) and drawn by Jan Fischer (1907–1960), presented daily adventures of five

第一期:チェコのコミックの現在(2000年以降)

チェコ共和国のコミックは、今、黄金期にあるといえるかもしれない。すべてのイデオロギー的抑圧がなくなり、世界と相互交流できるようになったため、世界中の代表的なコミックスにチェコ語で目を通すことができ(日本のマンガ含む)、翻訳前のおもしろい作品もほぼ手に入れることができるからだ。チェコ・コミック史への関心も高まり、オンドジェイ・セコラ、ヤロスラフ・フォグラル、カーヤ・サウデックなど、20世紀の有名なコミック作家コレクションが編纂され、若い世代の読者は先駆者の仕事を知ることができる。しかし最も重要なのはコミックスが低俗で馬鹿げたものであるというレッテルがなくなったことである。コミックスの評価が、「コミックスが発展した」国々と同様、肯定的なものになったのである。

一方、チェコ・コミック史の転換点となった、チェコ・コミックならではの出来事も起こっている。そのうちの3つの出来事は、2000年に魔法のように同時期に起こった。まず、『ルディ』の刊行。これは、チェコ・コミックを「オリジナル」足らしめる、もっとも独創的で興味深い作家バヴェル・チェフ(1968-)の初出版作品である。この独学のアーティストは、チェコには珍しく、コミック専門の作家として生計を立て成功している。なので、いつでも自分の時間とエネルギーを作品制作や市場確立のために費やすことができる。チェコ・コミックの歴史や、世界の冒険小説の古典などへの言及が多くみられる彼の詩的な物語は、いつでも熱心な読者に求められている。

コミックス雑誌『AARGH!』の創刊号が発行されたのも2000年である。当時は公的出版のプラットフォームがなかったため、この自費出版の雑誌は、クリエイターが自分の作品や、同世代のアーティストの作品を出版するためのプラットフォームとなった。ポーランドとスロベニアの同様の自費出版物に触発されて生まれた『AARGH!』は、若い世代のコミック作家に重要な出版の機会を与えた。また、『AARGH!』の出版に触発され同様の多くの自費出版物が出版された。『AARGH!』は現在、年刊の商業誌として、カラーで印刷されるものになってはいるが、その盛り上がりから唯一生き延びた雑誌でもある。今も若手コミック作家の作品は掲載されているが、現在この雑誌にはさらに大きな役割がある。例えばチェコ・コミック史の中で、忘れられた一部のアーティストについて詳細に調査した記事や、中東欧を中心としたコミックス・シーンの現状を紹介するなどの、ジャーナリスティックな側面である。

また最初の現代コミックスをテーマにしたコンベンションも、2000年に開催された。現在定例化されているコミックス関係のイベントの始まりである。チェコ共和国では、2015年以前に2つの主要イベントが開催された。秋のコミックフェスタは主にオルタナティブで多様性のあるコミックシーンに焦点を当てていた。春のクムベコンは翻訳ものも含めメジャーなコミックス全般を対象にしていた。残念ながらコミックフェスタは終了したが、遠からず同様のイベントが立ち上がるだろう。もっとも人々を集めているコミックス関連のイベントはアニメフェスタで、コミックスとアニメに特化した内容である。

2000年以降は、出版の形態が根本的に変化した。世界と同様、インターネットがコミックス発表のためのもっともアクセスし

易く、独立性も高いプラットフォームとなったのである。若い世代にとっては、ネットで作品を発表し世に出すことが自然になった。自費出版が盛んな時代は終わったが、少数のコピー本のアンソロジーや雑誌は、まだ完全に消えたわけではない。時にはシルクスクリーンで印刷された凝ったものも出版されている。また、新聞等の従来の伝統的なメディアも、時にはコミックスを掲載するスペースを設けている。だが、現在は単行本での出版が主流である。書店や図書館で、コミックスが自動的に児童文学に分類される時代はやっと終わりを告げた。

先述のパヴェル・チェフのほかにも、現在のチェコ・コミックシーンで活躍するアーティストのグループがいくつかある。まず、2000年以前は雑誌でコミックスを描いていたが、最近、単行本として出版されるグラフィックノベルの作家へと移行しているアーティストたち。その中で最も注目すべきは、フランス、ポーランド、ハンガリーでいくつかのグラフィックノベルが翻訳出版されているルチエ・ロモヴァー(1964-)である。レナータ・フーチコヴァー(1964-)原作の、アントニン・ドヴォルザークの人生を描いた作品は英語と韓国語にも翻訳された。もう一つのグループは、2000年以降、自費出版からデビューした中で、主に作者自身が著作権を管理しつつ活動する作家たちである。おそらく最も成功したのは、プラハの美術アカデミーを卒業したイジー・グルス(1978-)である。彼の習得した絵画技術は、いくつかのグラフィックノベルに表れ、目を見張るものがある。ブランコ・イェリネック(1977-)、ホンザ・バジャント(1979-)、トイボックス(1978-)もこのグループに所属するアーティストである。

従来の商業的なコミックスでは、主流でありつづけてきたタイプの作品を描くアーティストの中で、最も人気があるのは、19世紀の古典的な冒険小説を現代風に改作したベトル・コブル(1976-)だろう。彼は他にも、プラハに住むスーパーヒーローのシリーズを月刊連載している。かつて主流だった児童向けコミックスを描く作家は、トマーシュ・フルト(1976-)やダン・チェルニー(1982-)のような著名なアーティストが登場してはいるが、全体に少なくなっている。

他の芸術分野で主に活躍しているアーティストが、コミックス制作に参加することがある。例えば、著名な作家であるヤロスラフ・ルディシュ(1972-)は、グラフィックノベルの三部作「アロイス・ネーベル」(ドイツ語、フランス語訳あり)の原作者だ。ヴォイチェフ・マシエクとジアン・パビン(ともに1977-)は、主に映画制作に関わっているが、同時に現在のチェコ・コミックシーンで最もオリジナリティあふれる原作者の代表でもある。ダヴィッド・バーム(1982年)とイジー・フランタ(1978-)は、美術業界とコミックス業界を行き来することに成功している。

チェコ・コミックは(国が何度も変動することによって)伝統が十分に根付いていないことや、市場規模の小ささなどの問題を抱えてはいるが、20年以上にわたって継続し、発展している。その未来は明るいだらう。

Poland or Hungary, whereas comics adaptation of composer Antonín Dvořák's life story created by Renáta Fučíková (*1964) has been translated into English and Korean.

Another circle is formed of those who debuted in fanzines after the year 2000 and who mostly tend towards an authorial, creator-owned approach to comics. The probably most successful of them is Jiří Grus (*1978), a graduate of the Academy of Fine Arts in Prague. His perfectly mastered painting and drawing technique can be seen in several noticeable graphic novels. Branko Jelinek (*1977), Honza Bažant (*1979) or Toy_Box (*1978) belong to the same category of artists.

Among the artists focusing on pure mainstream, the most popular is arguably Petr Kopl (*1976), who adapted classical adventure novels of the 19th century in a modern way. Besides that, he was also the first to try to establish a monthly comic book series with stories of a superhero living in Prague. Paradoxically, comics for children – so prominent in the Czech comics history – has been standing back lately, although it has got its own remarkable artists, such as Tomáš Chlud (*1976) or Dan Černý (*1982).

Artists who are primarily active in other fields of arts also take sometimes part in making comics. Thus, for instance, the successful literary author Jaroslav Rudiš (*1972) became the writer of the script of the comics novels trilogy Alois Nebel (already translated into German or French). Vojtěch Mašek and Džian Baban (both *1977) are primarily related to the world of film making, but at the same time, they represent the two most original script writers of the Czech comics scene of the current time. Whereas David Böhm (*1982) and Jiří Franta (*1978) sometimes successfully switch from the world of fine arts to that of comics.

Czech comics still struggles with its problems, like its insufficiently rooted tradition or the small size of the market. However, nowadays, it has got more than two decades of continual and successful development behind itself, and the future can thus be seen in optimistic colours.

パヴェル・チェフ

Pavel Čech

1968年ブルノに生まれ現在も在住。元々は鍵職人の修業をしていたが、芸術・コミック・そしてイラストへの愛が勝り、1990年に最初のコミックスを自費出版、4年後には初めての個展を開いた。

2000年以降は、コミックスと絵本を融合した新しい方向性を切り開いた。現在は両方のジャンルの専門性を認められ、広く現代の巨匠として評価されている。長年にわたるコミックスや絵本のプロジェクト、例えば、おそらく最も野心的なコミックスである200ページの長編などによって、いくつかの賞を受賞している。

その長編「ペピーク・ストシェハの大冒険」(The Great Adventure of Pepík Střecha / 2012年)は、2013年にチェコにおいて重要な賞であるMagnesia Litera賞の児童書部門を受賞した。

伝統的な冒険物語とイラストレーションをこよなく愛し、生涯にわたるウッドクラフトリーグ(※)のメンバーであり、そして2人の息子の良き父である彼は、ノスタルジックなトーンと日々のはかない美しさでその作品を彩っている。

彼の作品には、北アメリカ人であるインディアンへの愛と、思春期の物語、そして過ぎ去った今も忘れ難い無垢な幼年期が生き生きと描かれている。

これまでに20以上の個展が開催され、その絵本は英語、フランス語、イタリア語、クロアチア語、ロシア語、スロベニア語に翻訳されている。またコミックスはルーマニアとウクライナで出版されている。

※ウッドクラフトリーグ=本展による追加注。アメリカで1902年に設立され、ボーイスカウト運動の原型になった青少年教育運動「Woodcraft Indians」の流れを汲む自然共生運動。チェコでは1921年に高校の生物教師ミロシュ・サイフルト(Miloš Seifert)が著書『Životem a přírodou k čistému lidství』を発表後ボーイスカウトと分化し、独自の発展をしている。

Pavel Čech (*1968) was born in Brno, where he lives and works up to this day. He trained to be a mechanical locksmith, but what prevailed was his love for art, comics and illustration. In 1990, he self-published his first comic book, four years later he had his first individual exhibition. Since the year 2000, his artistic oeuvre has taken a new direction, focusing at the same time on comics and on picture-books. In both of these specializations, he is widely considered a modern master: over the years he won several awards for his comic book projects and picture-books, his 200 pages long and probably the most ambitious comic book as of yet, *Velké dobrodružství Pepíka Střechy* (The Great Adventure of Pepík Střecha), was awarded the prestigious Magnesia Litera Award in 2013 (in the category “book for children”).

A huge admirer of traditional adventure stories and their illustrations, life-long member of the Woodcraft League and proud father of two sons, he fills his works with nostalgic tones and the ephemeral beauty of everydayness. His books resonate with his love for North American Indians, coming-of-age stories and now long gone, but still vividly remembered days of childhood innocence. So far, he has held more than twenty individual exhibitions and his picture-books were translated into English, French, Italian, Croatian, Russian and Slovenian. His comic books were published in Romania and Ukraine.

第二期:1945年までのチェコ・コミック

現代のコミックスに似たいくつかの特徴がある初期の視覚的な読み物は、例えば、中世の写本に見ることができる。パロック時代には、チェコ人の版画家として有名なウエンチエスラス・ホラー (1607-1677) がロンドンに居を構え仕事をし、時には(コミックスを思わせる)短い物語を描いた。

チェコ・コミックの前身を「チェコ語で定期刊行される印刷物」と定義するならば、チェコ・コミックの前身は、19世紀中頃まで見つけることはできない。当時、チェコの地域は、多国籍国家であるオーストリア帝国の一部で、公用語はドイツ語だった。オーストリア帝国を含めヨーロッパ諸国で起きた1848年の革命(2月事件)の際には、報道に対する当局の監視が一時的に機能を失い、チェコ語で最初の風刺コミックスが生まれた。

チェコの最初の著名なコミックス作家は、カレル・ヴァーツラフ・クリーチ(1841-1926)である。彼は1867年に初めて、何度も登場するコミックスのキャラクターを披露した。彼の作品、「Příhody strážníka Mrkvičky」(「ニンジンおじさん」)は、街に出かけた田舎者の物語だった。ほどなくしてクリーチはウィーン帝国の首都に移り住み、コミックス作家として長期間にわたり活躍した。1880年代から90年代にかけて、彼はイギリスの風刺雑誌『バック』でも描いていた。

1905-1906年、カレル・シュトロフがユーモア雑誌『シュヴァンダ・ドゥダーク』(バグパイブ弾きの陽気なシュヴァンダの意)に描いたコミックスのシリーズ「Pan Ľopásek」(「チョパーセクさん」)は、同じキャラクターの連作で、フキダシを使用しているなど、現代的なチェコ・コミックの形式をとった最初の作品だと考えられる。20世紀に入ると、コミックスは徐々に児童雑誌の一部に組み込まれていった。児童コミックス創設の父と言われているのはカレル・ラディスラフ・トゥーマ(1853-1917)であり、特に週刊児童雑誌『マリー・チテナーシュ』(小さな読者たちの意)に寄稿していた。彼は固有のキャラクターを登場させず、子どもたちの日常の愉快的な出来事を描いた。

チェコの出版物の真の盛り上がりは、1918年にオーストリア=ハンガリー帝国が崩壊し、チェコスロバキアが独立した後には始まった。コミックスは日刊新聞にも登場し始めた。そして、現代でもよく知られるチェコ・コミックのヒーローが登場したのもこの頃である。ヨゼフ・ラダ(1887-1957)は、ヤロスラフ・ハシエクの小説「兵士シュヴェイク」の挿絵画家として、今日では国際的に有名だが、コミックス「Šprýmovné kousky Frantíka Vovíska a kozla Bobeše」(「フランティック・ヴォヴィーセクと雄ヤギのボベシュのいたずら」)の作家でもある。このコミックスは、日刊新聞の『チエスケー・スロヴォ』(チェコの言葉の意)の週末増刊に掲載され、大人気となりすぐに単行本化された。ヨゼフ・ラダはその後、いくつかの新聞コミックスで人気を博した。しかし、新聞で最も成功したコミックス作家といえばオンドジェイ・セコラ(1899-1967)である。彼は、日刊新聞『リドヴェー・ノヴィニ』(人々の新聞の意)に、子どもや動物が主人公のコミックスシリーズを描き、中でも最も人気のだったのは、陽気でへこたれず、どんな時でもうまいやり方を思いつく蟻が主人公の「Ferdá Mravenec」(「ありのフェルダ」)である。フェルダの物語はまず1933年、コミックスとして新聞に連載された。3年後には、セコラによっていくつかのエピソードが再構成され、挿絵入りの児童書(コミックスではなく)として単行本化された。さらにラジオ、映画、舞台にも登場した。

セコラの作品のメディア展開は、第一次世界大戦終結後、チェコでアメリカのポップカルチャーの影響が急速に高まったことを示している。愉快的動物もののコミックスとしては、世界的に人気であったフィリックス・ザ・キャットがチェコで紹介された。最初のコミックス雑誌『コウレ』(ボールの意)が創刊された際、フィリックスが読者獲得のために掲載されたのである。同時期の子ども向けコミックスで最も人気があり、長期間連載された作品の1つも、アメリカ様式からの影響を受けていた。女性雑誌『リスト・パニー・ア・ジーヴェック』(婦人と少女のための雑誌の意)には、犬とその友人が登場するアメリカのコミックス・ストリップスが登場した。その反響から、編集者は、「Punt'a」(「ブンチャ」)という小さな犬を主人公とし

た、そのアメリカのコミックスと類似のオリジナルコミックス・ストリップスを制作することに決めた。「ブンチャ」の作家は、レネー・クラパッチ(1905-1980)が選ばれた。彼はチェコ人だが、国外での実績もあり、フランスの子ども向け雑誌とも組んで仕事をしていた。クラパッチ作品には、ウォルト・ディズニーのスタイルからの影響がよく表れている。「ブンチャ」は、連載当時から成功し続け、出版社はその名を冠した子ども向けの新雑誌を立ち上げた。『ブンチャ』誌は爆発的人気を獲得し、後年、他の児童向けコミックスが出版される重要な契機となった。

1930年代半ば以降、チェコ・コミックのジャンルは多様化した。探偵ものや西部劇のシリーズが大人向けコミックスとして登場し、普通の家庭を面白おかしく描いた作品も人気となった。1930年代後半の有名なコミックスはヤロスラフ・フォーグラル(1907-1999)原作、ヤン・フィシエル(1907-1960)画のコミックスシリーズ「Rychlé šípy」(「リフレイ・シーベ」/速い矢の意)である。街の5人の少年たちの冒険は、一貫してフキダシを用いて描かれ、プロットと、ダイナミックかつ興味深い描線の両方で読者を魅了した。あまりにも人気を博したので、チェコ・コミック全体に影響を与え、本作を模倣した少年達の冒険物語が数多く現れた。

しかしながら、チェコ・コミックの発展は、第二次世界大戦によって減速してしまう。1939年、チェコはナチス・ドイツによって占領され、コミックスを含むチェコの文化は意図的に排除された。転機の訪れは1945年、ヨーロッパでのナチス政権の敗北まで待たなくてはならず、そこからチェコ文化は再生し始めたのである。

experience from abroad, as he had collaborated with a French magazine for kids. The influence of Walt Disney's style of cartoons is apparent in Klapáč's work. Punt'a's new strip was so successful that since 1935, its publishing house started a whole new magazine for children named after the hero of the strip. In subsequent years, the Punt'a magazine was very popular and became also an important publishing opportunity for other comic strips for children.

After the mid 1930s, Czech comics genres grew in variety. Comic series intended for adult readers offered detective or western plots, and funny family chronicles became also popular. The most popular comic strip among those that began in the late 1930s was the comic series Rychlé šípy (Fast Arrows), written by Jaroslav Foglar (1907–1999) and drawn by Jan Fischer (1907–1960). Telling the adventures of five town boys, it charmed readers both with its plots and dynamic, yet always amusing drawing style, consistently using speech bubbles. Thanks to its popularity, this comic strip inspired a whole specific genre of Czech comics about organized groups of youngsters, as many other comic artists tried to copy its successful conception.

The further development of Czech comics was nevertheless slowed down by World War II – the Czech area was occupied by Nazi Germany in 1939 and Czech culture including comics was intended to be eliminated. A turning point came only as late as in 1945, after the defeat of the Nazi regime in Europe: it is only then that a renewal of Czech culture could begin.

カレル・イエリエ

カレル・イエリエは1977年プラハで生まれた。21世紀の初め、彼は芸術アカデミー(ミハエル・リットシュタインの絵画スタジオ)で学び、最初の短編コミックスを発表している。いわゆるジェネレーション・ゼロ(The Generation Zero/※)の著名なコミックス作家のひとりであり、多くの雑誌やイベント(Aargh!, Komiksfest!, Revue, Pot, Zkrat)、アンソロジー、インターネットなどでコミックスを発表している。2007年、彼はオイデプス王と、冒険物語の古典のリメイクした架空の歴史物語「巨匠ハンキーの暗号」というふたつの作品を自身の最初のコミックス単行本として発表した。

近年、イエリエはアートグループ・ナトヴルドゥリーに参加し、グループ展に参加することで、画家としても認知されてきている。それでもなお彼の愛する表現方法は依然としてコミックスであり、2013年以降、彼は3つの新しいグラフィックノベルを出版した。フランスの哲学者ヴォルテールによる古典「カンディード」の壮大な「再話」の二作(三部作最終作は2018年に発売予定)、そして素晴らしい歴史グラフィックノベル『1968年・ドゥブチェクのモスクワ降伏』である。後者において彼は共産主義時代のさまざまな政治的出来事を恐竜になぞらえて描いている。

※ジェネレーション・ゼロ=21世紀に入ってコミックス制作をはじめたクリエイターたちはチェコでは「ジェネレーション・ゼロ」と呼ばれることがある。彼らは出版可能性「ゼロ」の状態から活動をはじめ、収入の見込みも「ゼロ」、そして三つの「ゼロ」がついた2000年に活動をはじめたからである。

Karel Jerie

Karel Jerie (*1977) was born in Prague. This academically trained painter started to make his first short comics stories at the beginning of 21st century, in parallel to his studies at the Academy of Fine Arts (in the atelier of painter Michael Rittstein). One of the leading comic artists of the so-called Generation Zero, he presented his comics in all important fanzines and revues (Aargh!, Komiksfest! Revue, Pot, Zkrat), as well as in many anthologies and on the internet. In 2007, he published his first two solo albums: an adaptation of the classical story about Oidipus Rex (Oedipus Rex) and the imaginary historical adventure story Šifra mistra Hanky (The Master Hanka Code).

In recent years, Jerie is more and more appreciated as a painter – being a member of a Natvrldí art group, he exhibits widely (in collective as well as solo exhibitions). His beloved medium-of-choice is nevertheless still the comics. Since 2013, he published three new graphic novels: two volumes of his spectacular adaptation, or “re-working”, of Candide by Voltaire (the last volume of the trilogy is scheduled for 2018), and a brilliant historical graphic novel, 1968: Jak Dubček v Moskvě kapituloval (1968: How Dubček Surrendered in Moscow), in which he depicts various political representatives of Communist Czechoslovakia as dinosaurs.

第三期:1945-2000年のチェコ・コミック

第二次世界大戦後、しばらくのあいだチェコスロヴァキアでコミックスはブームになり、そのまま戦前の伝統が継承されていくかに見えた。だが、1948年2月の共産党によるクーデターののち、新体制の推進者たちはソビエト連邦のパターンを踏襲し、コミックスに「アメリカの邪悪な大衆コントロール装置」というレッテルを貼った。その結果、ほぼすべてのポピュラーなコミックストリップ(もっとも愛された作品である「リフレ・シーペ」もそこには含まれていた)が出版禁止になり、何人かのコミックスアーティスト(たとえば「ブンチャ」のレナー・クラパッチなど)は海外へと移住し、残ったアーティストたちは公共空間から締め出され、何人かはソビエト風の新しいアートスタイルで描くようになった。

1950年代はじめまで存在を許された、戦前の時代のコミックスキャラクターは「ありのフェルダ」だけだった。だが、それは作者であるオンドジェイ・セコラ(1899-1967)が、フェルダのその物語におけるイデオロギー的な立場を大きく変えたためだった。以前はいたずらものの個人主義者だったフェルダは社会主義的未來の熱心な建築者へと変身した。たとえばアリの集団が怠け者のナメクジを処罰したり、彼らが資本家のハムスターから冬の備蓄を盗み出したりする物語が描かれるようになった。他にも共産主義プロパガンダのためにコミックスを利用しようとする試みはいくつかあったが、結局のところコミックスのような視覚的な物語様式はこの新しい社会にはなじまないという結論がつけられた。この時期、コミックスは少数の児童向け雑誌の市場でのみひっそりと生き延びていた。ただ、そうした場所でもアメリカンコミックス特有の手法と考えられていた吹き出しや感嘆詞の多用は注意深く避けられた。

1956年初めには政治的、文化的状況の厳格さは少しずつゆるみはじめた、そしてコミックストリップは再び若者やその他の年齢層向けの雑誌に居場所を見つけはじめた。この時代の特徴は、検閲官の判断基準が曖昧だったことだ。このため雑誌や新聞の編集者たちはコミックスに関しては段階的にことを進めようとした——たとえばコミックストリップのひとつのエピソードに一個か二個のフキダシを紛れ込ませ、もしそれに対して当局からネガティブなリアクションが返ってこなければ、彼らは次の機会にはフキダシを増やした。もうひとつの信頼度の高い方法はソビエト文学(多くは児童文学や冒険小説、SF小説など)からのコミカライズだった——「思想的に正しい」と認められた作家たちの作品のコミックス化は出版禁止を回避する可能性を増やすものだった。

1960年代の政治的緊張緩和の進展は少なくともいくらかの西洋のコミックスの流入と1948年以前に活躍していたチェコのコミックスヒーローたちの帰還の可能性を開いてくれた。中でも特筆すべきなのは「リフレ・シーペ」の復刊だろう。旧作を再編集した単行本の出版はすぐに新しいコミックス雑誌の出版へとつながり、「リフレ・シーペ」の新エピソードの発表が期待された。

また、この時期にはいくつかの新しい動きが胎動をはじめている。この時期のもっとも傑出したチェコのコミックスアーティストであるカーヤ・サウデック(1935-2015)は幼少期からアメリカンコミックスのヒーローたちに魅了されていた。まず彼は自分自身の楽しみのために創作し、自作をコピーして友人たちに配っていた。彼は独自の風刺をベースにした作風を磨き続け、1960年代末には政治状況も緩和されており、しばしばセクシーな女性の曲線美で大人の読者の目を楽ませる彼の大人向きのコミックス作品が公式に出版を許されるほどだった。当時のチェコスロヴァキア読者にとって西側のコミックスはなじみがないものだったため、それらの作品は斬新な驚きをもたらし、すぐに大きなポピュラリティを獲得した。当時の検閲は以前より厳しくなかったのだが、サウデックのコミックスはあまりに「アメリカ風」過ぎた。そのために彼の作品は完結を待たずに当局から出版を差し止められることになった。

だが、カーヤ・サウデックは時代が彼に、より大きな仕事を与える機会を与えたのだと感じていた。そして彼は100ページを超える長さの作品、美しい女医ムリエルと羽の生えた男のSF冒険コミックス「ムリエルと天使たち」の創作をはじめた。ミロシュ・マツォウレク(1926-2002)の脚本によるこの作品はジーン・

クロード・フォレストの著名なフランスのコミックス作品「バーバレラ」から影響を受けたもので、プロットは1960年代の高揚した、しかしまだ純朴な文化状況を反映している。不幸にもサウデックがこの作品を完成させる前にチェコスロヴァキアは1968年8月、ワルシャワ条約機構軍によって占領される。マツォウレクとサウデックはコミックスを通してこの状況に抵抗しようとした——彼らはムリエルを主人公とした二つ目の物語「ムリエルとオレンジ色の死」を異星人による地球侵略の物語にすることで、作品を現在の出来事についてのあからさまなアレゴリーに仕立てようとした。このムリエル二部作は合計で200ページを超える大作だが、クリエイターたちの様々な努力にもかかわらず、1989年の政治体制の変化までチェコスロヴァキアでの出版が許されることはなかった。

1960年代後半に起きたもう一つの重大な出来事は児童向け雑誌『チティジリーステック』(四葉のクローバーの意)の創刊である。その設立者の一人であるコミックスアーティスト/イラストレーターのヤロスラフ・ニエメチェク(1944-)は幼いときレナー・クラパッチのコミックストリップに親しんでいた。また、のちに彼は海外旅行の際に出会った西ヨーロッパの児童向けコミックス雑誌からインスピレーションを与えられた。1970年代初頭、チェコスロヴァキアの政治情勢は厳しくなっていたが、『チティジリーステック』は低年齢の児童向けという雑誌の性格から(四葉のクローバーの幸運もあって)生き延びることが出来た。この雑誌のタイトルにもなっている作品「チティジリーステック」は四匹の動物の仲良しグループ——犬の女の子と猫の男の子、子豚、子ウサギ——を描いたもので、だからこそその時代から今日まで出版を続けることが出来たのである。現在ではこのシリーズはチェコ・コミック史上最長のシリーズになっている(1000話以上のエピソードが発表されている)。

1968年の侵攻後、政治体制は完全に1950年代の状況に戻ったわけではなかった。コミックスに関しても完全に否定されていたわけではないが、カーヤ・サウデックの斬新な作品や「リフレ・シーペ」シリーズのような作品はもう出てこなかった。

共産主義体制が終焉する1989年11月の少し前にチェコスロヴァキアで新しいコミックス雑誌が創刊された。『コメタ』(彗星の意)という名のその雑誌は、こうした長年の悲しむべき状況のうちに出現した、コミックス専門の定期刊行物を確立しようとする新たな試みだった。1989年の共産主義体制崩壊後、『コメタ』は政変後に登場した新雑誌とともに新世代のコミックスアーティストたちに出版の可能性を切り開いた。しかし、多面的な要因からこのコミックスブームはすぐに収束に向かう。そして1993年以降の数年間、チェコ・コミックは再びチェコ社会からほとんど消えてしまった。カーヤ・サウデックはほとんどエロティック専門のイラストレーターになり、この新しい資本主義社会で若いコミックスアーティストたちはみなコミックスを捨ててコマースイラストレーションや他のもっと金になる仕事に向かった。そして現在、コミックスは自由市場の中で新しいあり方を見出しているが、その間『チティジリーステック』一誌だけがチェコ・コミックを支え続けていた。

Episode Three : Czech Comics 1945-2000

After the end of World War II, for a short time comics in Czechoslovakia boomed and it seemed it might have been possible to continue in its pre-war tradition. However, after the communist coup d'état in February 1948, the ideologists of the new regime followed Soviet patterns and comics was labelled “an American evil-minded device to manipulate masses”. Consequently, nearly all popular comic strips were banned from being published (including the most beloved strip *Rychlé šípy* /Fast Arrows/), some comic artists (like for example René Klapač) emigrated, others were forced out of the public space and some submitted to the new artistic style adopted from the Soviet Union.

The only comics hero from the previous era who was allowed to continue till the early 1950s was Ferda Mravenec (Ferda the Ant). Nevertheless, that was possible only because his creator Ondřej Sekora (1899–1967) severely changed the ideological plan of his stories: thus the previous impish individualist Ferda turned into a determined builder of the socialist future, who leads, for instance, a collective of other ants to punish a lazy slug, or steals the winter stockpile from a capitalist hamster. Besides that, there were some other attempts to use comics for purposes of the communist propaganda, yet in the end prevailed the conclusion that the comics type of visual narratives is not suitable for the new socialist society. Comics survived only in a few magazines for children, carefully avoiding any use of speech balloons or interjections, which were both considered the main features of the condemned American comics production.

Beginning with the year 1956, the harshness of the political and cultural conditions slowly weakened, and comic strips once again could find their way to magazines for youth and other periodicals. Characteristic of that era was that the borders of the censors' tolerance were not firmly set, and thus with regard to comics, editors of magazines and newspapers tried to proceed step by step – for instance, they tried to slip one

or two speech balloons into an episode of a comic strip, and if there was no negative reaction from the authorities, next time they increased their number. Another reliable method was to adapt plots from Soviet literature (often children's literature, adventure or sci-fi novels) into comics – names of the “ideologically approved” authors increased the possibility that the comics adaptation would not be banned.

The increasing political détente in the 1960s brought better possibilities to get at least some of the comics from the West, and it also led to the resurrection of some of the domestic comic heroes from before 1948. Most notably, *Rychlé šípy* (Fast Arrows) started being re-edited, and these issues of the collected old strips soon transformed into a new comics magazine, offering also an opportunity for new episodes to be published.

A few new phenomena were born at that time, too. The most outstanding artist of the Czech comics of the era was Kája Saudek (1935–2015). Being fascinated since his childhood with heroes of American comics, at first he created his own works copying their just to amuse himself and his friends, but he continually developed his own original style based on ironical exaggeration. In the late 1960s, the political conditions allowed him to officially publish his comics for adult readers, often taking delight in excessively sexy female curves. For the Czechoslovak audience, which was not so familiar with the western comics production, these works were surprising and daring, and soon they became enormously popular. Although censorship of those times was less strict than before, Saudek's comics' look was so “American”, that some of them were stopped by the authorities even after their publication could be finished.

Nevertheless, Kája Saudek felt the time offered an opportunity for him to create a larger work and he started to labour on the ambitious, over 100 pages long comic book *Muriel a andělé* (Muriel and the Angels), a sci-fi adventure of the beautiful female doctor Muriel and a winged man. Written by Miloš Macourek (1926–2002), this comics was inspired among others by the famous French comics

Barbarella by Jeane-Claude Forest, and the whole plot mirrors the intoxicating, yet naive atmosphere of the 1960s. Unfortunately, before Saudek could finish this work, Czechoslovakia was occupied in August 1968 by the army of the Soviet Union and its satellite states. Macourek and Saudek reacted via comics – they started preparing a second part of the story about Muriel. They called it Muriel a oranžová smrt (Muriel and the Orange Death) and its plot about aliens invading the Earth brought a transparent allegory of the current events. Both comic books together were over 200 pages long, but in spite of all the efforts of their creators, their publishing was not allowed and had to wait till the change of the regime in 1989.

The other crucial phenomenon born in the late 1960s was the children's magazine Čtyřlístek (Four Leaf Clover). One of its founders, the comic artist and illustrator Jaroslav Němeček (*1944), loved comic strips by René Klapač when he was a child, and later, on his trips abroad, he found inspiration in West European comics magazines for kids. Despite the fact that in the early 1970s, the political situation in Czechoslovakia became tougher, Čtyřlístek – with some luck – managed to survive, because its intended audience were little children. The title comic strip Čtyřlístek, dealing with four animal friends – a she-dog, a tomcat, a pig and a hare – thus could continue, and as it is still being published today, it has developed into the most extensive Czech comics series of all time (until now, there have been more than 1000 episodes).

After the invasion in 1968, the political regime did not go entirely back to the situation in the 1950s, nor did it condemn comics totally, but comics like the daring works of Kája Saudek or the Rychlé šípy (Fast Arrows) series had to disappear yet again.

Not long before the end of the communist era in November 1989, a new comics magazine appeared. It was called Kometa (Comet) and after many years of a rather sad situation, it represented a new attempt to establish a periodical dedicated to comics. After the fall of the Communist

regime in 1989, Kometa together with other newly established magazines that appeared after the political change opened a publishing possibility for a new wave of comics artists. But for many reasons of various character, the comics boom was soon over and, after 1993, for a few years, Czech comics once again almost vanished from the public space. Kája Saudek created almost exclusively only erotic drawings and, in the new capitalist environment, all the young comics artists abandoned comics to draw commercials and get into other more profitable activities. And thus, although comics was now able to find a new situation on the free market, only Čtyřlístek represented a continuity in the Czech comics field.

ルチエ・ロモヴァー

現代チェコ・コミック界の貴婦人、ルチエ・ロモヴァー(1964-)は最初のコミックスである若い二匹のネズミを主人公とした単発の作品「アンチャとペピーク、尾行する」を1980年代末に出版した。この美しい線と素晴らしい彩色で描かれ、はっきりした世界観とミステリ的なひねりのあるプロットを持ったファニーアニマルコミックスはこの一作では終わらず、ロモヴァーはこのシリーズをその後10年間にわたり61話発表している。「アンチャとペピーク」はおそらく1990年代もっとも愛された児童向けコミックスのひとつであり、現在も幅広く読まれている(新しい全五巻のコレクテッド・エディションが近年刊行されている)。この作品は人形劇化され、最近ではテレビ放映もされた7本の短編アニメーションにもなっている。

18

2000年以降、ロモヴァーは創作活動の軸を大人向けの作品に移し、こちらの分野でも児童コミックスの分野同様急速にその名声を高めている。彼女のグラフィックノベル作品「アナは飛びたかった」、「野生児たち」、「標的」はまずフランスで、おそらくもっとも著名なコミックス研究者のひとりであるティエリ・グルンステンが設立した出版社・ドゥラン2から出版された。繊細に考え抜かれたルチエ・ロモヴァーのストーリー(彼女は作画だけでなく、自身で脚本も手掛ける作家である)は現代チェコ・コミックの作品群の中でも最良のものであり、チェコとフランスで多くの賞を獲得し、ドイツ語とポーランド語にも翻訳されている。

Lucie Lomová

The grand dame of contemporary Czech comics, Lucie Lomová (*1964) published her first comics – a stand-alone story about two young mouse friends, Annie and Joey on the Trail (Anča a Pepík na stopě) – at the end of the 1980s. This beautifully drawn and brilliantly coloured funny animals story with a fully realised world and detective plot was just the beginning – over the following decade, Lomová prepared 61 episodes of this series. Annie and Joey (Anča a Pepík), maybe the most beloved children comics of the 1990s, is still widely read (a new five-volume collected edition has just been published earlier this year), it was adapted for theatre and recently also for a television as a series of seven short animation films.

After the year 2000, Lomová shifted her attention to comics for an adult readership and quickly gained prominence in this field as well. Her graphic novels Anna Wants to Jump (Anna chce skočit), Savages (Divoši) and Shooting Star (Na odstřel) were originally published in French, in the publishing house of the arguably most prominent contemporary French comics scholar Thierry Groensteen. The meticulously thought-out stories of Lucie Lomová (who tends to work as a solo auteur, writing her scripts as well) are among the best modern Czech comics, won several awards and in addition to Czech and French, they were published in German and Polish.

第四期:チェコ・コミックのメディアミックス &チェコ・コミックの中の日本

チェコ・コミックのメディアミックス

1920年代から、チェコのコミックスキャラクターはコミックス以外の媒体に少しずつ浸透し始めた。おもしろいことに、最初にコミックスキャラクターが登場したのは絵本である。長いあいだ、コミックスの芸術的価値はとて低く見られていたため、絵本であったとしても、文学として発表されることは、作品にとっても、その著者にとっても名誉なことであった。大人気になった「ありのフェルダ」や「リフレ・シーペ」(速い矢の意)は、発表されてからすぐに書籍化された。

コミックスの人気キャラクターを使い始めたもうひとつの媒体は人形劇である。チェコの文化背景から生まれ、長い歴史を持つ伝統芸である人形劇は、1920年代から1930年代にかけて、ヨゼフ・スクパが作り出した人形劇「シュペイブルとフルヴィーネク」が人気を博し、更なる活気に溢れた。そして、新聞『リドヴェー・ノヴィニ』のコミック・ストリップで人気になったオンドジェイ・セコラのキャラクターが、ブルノ・ラドスト劇場の人形劇となり話題を集める。それがコミックス、「フナートとパトルチカ」である。これはスポーツをこよなく愛する2人の大人が主人公で、タイトルはその2人の名前である。これは主人公が大人と言うこともあり、大人向けの作品だった。ほぼ同時期に『リドヴェー・ノヴィニ』紙に掲載されていたセコラのもうひとつの作品、「ツヴォチェク」は少年ツヴォチェクが主人公で、こちらは子ども向けであった。このツヴォチェク少年もブルノ・ラドスト劇場で人形劇が上演され、人気を博した。コミックスのキャラクターから操り人形が作られる際、セコラがデザインを手がけた。1930年代には、コミックスの様々なキャラクターが操り人形になった。人形劇は当時ほど大衆的な人気はないが、今日でもいくつかのコミックスは人形劇に書き換えられ、成功を収めている。「ヴラスとブラダの大冒険」(ヴラスは髪、ブラダは顎の意)がその一例だ。著名な芸術家、フランティšek・スカーラが原作と作画の両方を手がけたこの作品は、ミノール人形劇場で上演された。また、コミックスから人形劇への変換だけでなく、人形劇からコミックスへの変換も見られる。先述の「シュペイブルとフルヴィーネク」は、今日に至るまで、人形劇の続編がコミックスとして描き続けられており、多くの新聞にコミック・ストリップとして掲載されている。

1932年には、チェコで初めてコミックスが実写化された。長編のミュージカル映画、「ペピナ・レイホルツォヴァー」(ヴァーツラフ・ビノヴェツ監督)は、映画と同じタイトルの原作「ペピナ・レイホルツォヴァー」(フランチšek・ヴォポルスキー作)のヒロイン、ペピナの日常から自由に着想を得ている。原作の面白さは、世間知らずで単純な性格の田舎娘が上京して出会う、都会生活とのコントラストにある。次にコミックスが実写化されるには1993年まで待たなければならぬ。ペトル・コテク監督の「知恵の輪の謎」は「リフレ・シーペ」を劇場化したものだ。他のコミックス作品は、今はまだ、実写化されていない。数年前から1960年代のアクションSFコミックスを実写化する試みがあるが、巨額の資金が必要とされ、実現は難しいだろう。

そのような中、生まれながらにして様々な媒体に登場しているキャラクターがいる。「ありのフェルダ」である。1930年代末には人形劇に登場し、ラジオに、そしてレコードに録音され発売された。このありのヒーローの作品には、当時、作者のセコラが強制労働所に入れられていたにも拘らず、第二次世界大戦中に製作された10分程の人

形アニメ映画(1944年)すらある。このヘルミーナ・ティールロヴァー監督の作品は、当時の人形アニメとしては、かなりの長編だった。その後、フェルダのアニメ映画がいくつも作られ、今日まで続いている。

第二次世界大戦後、コミックスとアニメのつながりは更に強くなる。1965年にチェコスロヴァキア国立テレビ局が、毎晩、幼児向けアニメを放映するようになり、1969年に子ども用コミックス雑誌、『チティジリーステック』(四つ葉の意)が創刊されると、このふたつの世界はより一層結びつきを深めた。何作ものシリーズがテレビと雑誌の両方で放映、掲載された。ふたつの媒体で同時進行したわけではなく、時にはテレビで始まった番組がコミックス化されて雑誌に載ることもあり、その逆の場合もあった。共産主義独裁政権崩壊後、この関係は以前ほど密ではなくなってきたものの、まだ、消えてはいない。ルチエ・ロモヴァーの二匹の鼠の冒険物語「アンチャとペピーク」もそのひとつだ。1990年代の『チティジリーステック』で最も人気のあったコミックスで、2017年には第1シーズンがテレビ放映された。アニメ映画化されたコミックスの中で最も成功したのは「アロイス・ネーベル」だ。二人の作者、原作ヤロスラフ・ルディシュと作画ヤロミール・シュヴェイジークの3部作からなるコミックス(2003-2005年)をアニメーション化した、この田舎の駅長の話は、20世紀におけるチェコの国土の複雑な歴史を反映している。映画は、2011年に映画監督トマーシュ・ルニャークがロスコーブの手法を使って撮影し、ヨーロッパ映画賞の長編アニメ部門で最優秀賞を獲得した。

チェコ・コミックと日本

20世紀のチェコ・コミックに日本が与えた影響はあまりなく、あっても、どちらかと言えば、一般のチェコ人が持っている「日出づる国、日本」という、ステレオタイプのイメージだ。そして、20世紀において、日本に関連したチェコ・コミック(のようなもの)で最も興味深いのは、1980年、カーヤ・サウデックの執筆による『チェコ展ガイド』(日本で開催されたチェコ展のガイドブック)という短いものである。このガイドブックにはスタニスラフ・ホリーによるイメージイラスト、ズデニェック・ブリアンによる恐竜の作品も含まれている。時には日本の昔話や伝説をもとにした作品や、1989年のピロード革命後は、国境も自由に入出入りできるようになり、日本はエキゾチックな旅行先としてコミックスに出てくるようにもなった。1994年の『チティジリーステック』では、主人公たちが「日本のクリスマス」の回で、日本を訪れる。連載コミックス、「ゴロ、猿の守り人」はチェコ・コミック界で初めて環境問題を話題にした作品のひとつだが、その誕生も、どちらかという偶然と言うべきものだ。

21世紀に入ると、インターネットと海外作品の翻訳本により、チェコに日本のマンガ(そしてアニメ)が浸透し始め、若い、駆け出しのコミックス作家に多大なインスピレーションを与えるようになる。「fans manga.cz」というウェブサイトには日本マンガの愛好家が集まるようになり、日本のマンガの近況を伝え合ったり、マンガの自主翻訳をしたりするだけに留まらず、自ら「日本スタイル」のマンガを描き始めた。2009年からアンソロジー、『ヴィエーイーシュ』(扇の意)が、毎年、彼らによって出版されている。そして、その中の何人かは、テサーシュ兄弟が『妖怪学校』、『ヴァーサス』と『千の仮面』を出版したように、単行本を出版するにいたる。

Czech Comics in Other Media

Since the 1920s, Czech comics' heroes have been gradually settling also in other media. Illustrated fiction (prose) for children belonged among the early colonised areas. For a long time, comics had been seen as a "lower" form of creative activity, adapting popular comics stories for prose thus meant, among others, increased prestige for the given piece of art, as well as of for its creator. Such popular Czech comics characters as Ferda the Ant (Ferda Mravenec) or Fast Arrows (Rychlé šípy) were therefore adapted (sometimes being extended at the same time) for literature as early as at the very beginning of their comics existence.

Another medium that started using popular comics heroes very early was puppet theatre. In the 1920s and 1930s, it had had a long tradition and was on the rise thanks to the popular performances of Josef Skupa and his puppet characters of Spejbl and Hurvínek. Characters by Ondřej Sekora that had been popular earlier in comic strips on the pages of the daily newspaper Lidové noviny belonged to the greatest attractions of the Theatre Radost in Brno: sportsmen Hnat a Patrčka were intended for adult readers, kids could enjoy Sekora's hero Cvoček. Marionettes of these characters were designed by Sekora himself. In the 1930s, many other heroes that had originated in comics became protagonists of puppet theatres. Nowadays, puppet theatre does not enjoy such massive popularity as in the past, nevertheless, even today some comics may be adapted for puppet performances – one example being the comics story The Great Journey of Hair and Chin (Velké putování Vlase a Brady), written and drawn by acclaimed artist František Skála, which was adapted for a puppet show by the Theatre Minor. Remarkably, the transfer between two media can also happen the other way round: from theatre into comics – especially stories of the above mentioned Spejbl and Hurvínek have been adapted for comics several times, and even nowadays there is a newspaper strip bringing their stories.

Czech audiences could enjoy the first feature film based on comics motives as early as in 1932. The musical comedy Pepina Rejholcová

directed by Václav Binovec was inspired by the stories of the comics character of the same name by František Voborský. The humour of the original comics series resulted from the contrast between the righteous, yet simple country girl and the worldly environment of the city. However, the next feature film with comics heroes was not created before 1993 – in that year, The Mystery of the Conundrum (Záhada hlavolamu), directed by Petr Kotek, brought the still popular Fast Arrows to the silver screen. There are no other live-action movie adaptations of Czech comic books – for many years, several adaptations of popular sci-fi and adventure comics of the 1970s have been discussed, however, such projects are so financially demanding that it is not very probable they will be realized.

A very important hero appearing in many other media since his comics birth was Ferda the Ant (Ferda Mravenec). In the late 1930s, there was a theatre adaptation, a radio play, and his stories were recorded on gramophone albums. The early phase of Ferda's success in the Czech pop-culture climaxed, a bit paradoxically, in 1944, when a ten-minutes-long puppet-animated film with Ferda was premiered in cinemas. At the same time, this film directed by Hermína Týrlová was the first Czech puppet-animated film of such length. During the next decades, Ferda was animated in films several other times, now and then it is still happening today – however, the quality oscillates significantly.

After World War II, characters could sometimes migrate between film and comics in both directions. Film and comics became closely interconnected especially during the 1970s and 1980s, thanks to the fact that every evening, Czechoslovak TV broadcasted a short home-produced film for children. At that same time, the comics magazine for kids Čtyřlístek became very popular, and many heroes appeared both in the short TV films as well as in the magazine. Sometimes, original comics heroes became TV stars, sometimes it was the other way around, with TV characters finding a new life in comics stories. Since the change of political regime in 1989, these tight relations have loosened, but they have not entirely disappeared. The most current result of these relations are the stories of the two mice friends Annie and Joey (Anča a Pepík), created by Lucie Lomová. During the 1990s, they belonged to the most popular comics series in the magazine Čtyřlístek. In 2017, Czech TV premiered

the first cartoon series of their animated adventures. The most successful Czech animated film project is the feature film Alois Nebel. The adventures of a railroad worker living in a small rail station far away from all main tracks reflect the complicated history of Czechoslovakia in the 20th century. Alois Nebel's stories, created by Jaroslav Rudiš and Jaromír Švejdík, were primarily published in three graphic novels (2003-2005). Director Tomáš Luňák based himself on these in 2011 to shoot the film Alois Nebel, using the technique of rotoscoping. The film won the European Film Award for best European animated film.

Czech Comics and Japan

Only seldom did Czech comics of the 20th century look for inspiration towards Japan. When it happened, it often reflected stereotypical associations connected with the “Land of the Rising Sun” in the collective popular imagination. Perhaps the most interesting “almost-comics” in 20th century piece of art connected with Japan is the short Guidebook created in 1980 by Kája Saudek for a Czech exhibition visually conceived by illustrator Stanislav Holý, and including artworks depicting animals from prehistoric times by Zdeněk Burian. Besides that, here and there, several short comics adaptations of Japanese fairy-tales and legends. After 1989's Velvet Revolution, the state borders opened and offered new possibilities of travel: Japan then became one of the new attractive exotic destinations that could be visited – also by protagonists of Czech comics. In 1994, the popular four friends of the comics series Čtyřlístek thus paid Japan a visit in the episode Christmas in Japan. Another comics worth mentioning is the series Goro, Protector of Macaques (Goro, ochránce makaků), which became one of the very first Czech comics stories with an explicit agenda of environmental protection.

At the beginning of the 21st century, via the internet and free travel, Japanese manga (and anime) started influencing Czech culture and inspired a lot of young comics artists. A group of active fans established itself around the website manga.cz. Gradually, just reading and translating original mangas stopped to be enough for them, therefore they started creating and later even publishing their own comics “Japanese style”.

Since 2009, the annual anthology Vějíř (The Folding Fan) has been offering the best of these creative activities, however some of the artists – for example the brothers Tesařs, creators of the horror comics The Monster High School (Gymnázium příšer), Versus and One Thousand Masks (Tisíc masek) – publish their comics in book (tankobon) formats.

ニッカリン

ニッカリン(本名、ミハル・メンシーク)は1987年生まれ、本展示で紹介されている作家の中では最も若いアーティストのひとりだ。彼は1989年の共産主義独裁政権崩壊後の社会で育った世代で、世界中のコミックスや大衆文化に制限されることなく触れることができた。それゆえ、彼の作品には世界的に有名なコミックスやアクション映画、テレビゲームなどから題材や手法を取り入れているのを見ることができる。ニッカリンの初期作品では、フランスのBD作家メビウスからインスピレーションを得ているのがはっきりと見て取れ、また、日本マンガからの影響もうかがえる。

ニッカリンの作品の中で最も野心的なものは、間違いなく三部(もしくは四部作になるかもしれない。第4巻発売が予告されているので)からなる「130」シリーズだろう。それはロードムービー・ファンタジーとでもいうべき作品で、「ボ」という名の巡礼者が不思議な世界を彷徨い歩く中、奇妙な生き物や物と出会う物語だ。このように「真面目」な作品を描く彼だが、日本のRPGのパロディーとも言える、「スペルソード・サガVII: アルティメイト・ドラゴン・ファンタジー・クエスト」も制作している。現在、ニッカリンは若い読者向けの作品を中心に、子ども、青年向けのシリーズ物、もしくは読みきりのコミックスを描いている。

Nikkarin

Michal Menšík (who publishes all his works under the nom de plume Nikkarin) was born in 1987 and is the youngest of the comics artists featured in our exhibition. He belongs to the generation that grew up after the fall of the Communist regime (which took place in 1989) and therefore had an unlimited access to world comics and global popular culture. In his award-winning comics works, one can easily identify the influence of global comics celebrities (Moebius was the most obvious source of inspiration for Nikkarin's early works, but traces of Japanese manga are also notable), action movies and computer games.

The most ambitious comics work by Nikkarin is without any doubt his trilogy (or maybe tetralogy, if the announced additional volume will ever see the light of the day) called 130. This fantasy road-movie of sorts tells the story of a pilgrim named Bo who wanders through foreign and mysterious lands, encountering no less foreign and mysterious beings and objects. On a lighter note, in 2012 Nikkarin also created a parody of Japanese RPG-games called Spellword Saga VII: Ultimate dragon fantasy quest. Recently, Nikkarin is focusing his attention on a younger audience, working on series for children and one-shot comic strips for young adults.

